



Title	日本語音声言語の記述的研究 : 『日本語話し言葉コーパス』による再検討
Author(s)	岡田, 祥平
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49413
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【40】

氏 名	おか だ しょう へい 岡 田 祥 平
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 6 2 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	日本語音声言語の記述的研究－『日本語話し言葉コーパス』による再検討－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 土岐 哲 (副査) 教 授 真田 信治 准教授 石井 正彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、国立国語研究所・情報通信研究機構（旧通信総合研究所）・東京工業大学 が共同開発した『日本語話し言葉コーパス』を使用し、従来の日本語音声学の記述を計量的に再検討したものである。本文は、400 字詰原稿用紙換算で約 710 枚に相当する。本論文は 3 部からなる。第Ⅰ部が「理論的背景編」、第Ⅱ部が「『日本語話し言葉コーパス』の言語資料的性格をめぐる諸問題の検討編」、第Ⅲ部が「日本語音声言語の諸相の記述再検討編」である。序章では、先行研究の問題点とその背景を概観する。続く第Ⅰ部の理論的背景編は、2 つの章で構成される。第Ⅰ章では、従来の日本語音声言語の研究において、音声言語に特徴的な現象であるとされてきた「縮約形」を足がかりに、従来の日本語音声言語研究の記述のあり方、視点に含

まれる問題点を検討する。具体的には、「縮約形」「音変化形」の先行研究を概観した上で、従来の研究で「縮約形」「（音声言語における）音変化」と呼ばれてきた現象を、①書記言語に取り入れられた音声変異出自と想定できる単語、②顕在的な音声変異、③潜在的な音声変異、④音韻レベルで観察される個人的差異・偶発的現象の四つに分類でき得ることを述べる。続く第 2 章では、第 1 章での議論を踏まえた上で、音声変異研究では音韻論的対立という概念も導入することが必要であると論じる。同時に、音声変異と異音の違い、語形変異と音声変異の違いについても考察する。第Ⅱ部の『日本語話し言葉コーパス』の言語資料的性格をめぐる諸問題の検討編は、3 つの部分からなる。第 3 章では、『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese、以下、英略称 CSJ と表記する)の言語資料的性格を検討することの必要性を述べ、CSJ が真田信治や森岡健二のいう〈標準語〉(フォーマル場面で使用される日本語)のコーパスであることを作業仮説として設定する立場を表明する。同時に、そのことにより、どのような研究が可能になるか、CSJ を使用した研究の可能性についても検討する。第 4 章では、CSJ に付与された言語学的情報の中でも、特に音声学的情報の妥当性について検討する。この作業を通じて、従来の音声の言語学的研究のあり方(音声という連続的な情報を記号という離散的な情報に置き換えるやり方)を再考すべきであるとも指摘する。第 5 章では、従来の認識ではまったく別個のものとして扱われてきた独話と対話にも連続性が認められることを論じる。このことにより、CSJ は独話中心のコーパスではあるが、CSJ の分析結果が独話にしか適用できないとの言説に反論する。第Ⅲ部の日本語音声言語の諸相の記述再検討編は、5 つの部分で構成される。ここでは、先行研究などで指摘はされてきたものの、詳細な記述まではなされてこなかった諸現象を取り上げ、CSJ により、計量的な側面も踏まえつつ、精緻な記述を試み、先行研究での言及の妥当性などを検討する。具体的には、まず第 6 章で、現代日本語の音声言語に生起するモーラの出現頻度を概観する。続く第 7 章では、従来の研究では現象が生起する言語内的条件についての見解が必ずしも一致してはいなかった〈促音〉化(促音もどき)の実態を概観する。その結果、変異現象としての〈促音〉化が特に生起しやすいモーラは「ク」であること、〈促音〉化が生起する傾向が認められるモーラは「キ」「ツ」「イ」であること、〈促音〉化には音韻論的な条件の関与も考えられること、などを明らかにする。第 8 章では、無声子音が前接する境界直前(言い切り直前)の狭母音の無声化を取り上げる。先行研究では典型的母音無声化環境であるとされた境界直前の狭母音であるが、「です。」「ます。」の「-す。」の母音以外の、いわゆる語末の狭母音(たとえば、「歩く。」の「-く。」の母音)は無声化しない傾向が顕著であることを明らかにしている。同時に、「です。」「ます。」の「-す。」の母音は、無声化する場合が優勢であるものの、時に無声化しない場合があること、無声化するか否かに最も大きく関与している要因は話者の性別であり、女性のほうが無声化と非無声化を巧みに使い分けている傾向があることを明らかにする。第 9 章では動詞「言う」の語幹の発音について、どのような場合に非規範的な発音が生起するか、計量的な記述を行っている。その結果、非規範的な発音は全ての活用形に等しく生起するわけではなく、未然形と連用形促音便の際にのみ生起しやすい傾向にあることを確認している。また、未然形と連用形促音便における非規範的な発音生起の言語内的条件・言語外的条件を検討する。第 10 章では「雾咽気」という単語の発音について、「フインキ」という非規範的な発音生起の実態、ならびに非規範的な発音生起の言語内的条件・言語外的条件を考察した。その結果、先行研究での指摘とは異なり「フインキ」という規範的な発音が主流であることを明らかにすると同時に、非規範的な発音生起の実態も明らかにする。終章では、第Ⅲ部での議論を中心に、本論文の総括を行っている。

日本語音声学の従来の研究は、研究者の日々の観察の結果を積極的に拾ってきた。研究者の日常の観察の結果は、非常に示唆に富む。しかし、そのような観察の結果は、偶発的現象を記述した結果に過ぎないのか、あるいは多くの日本語母語話者にも観察され得る現象なのか、判然としない場合も多かった。さらに、先行研究では取り上げられていないにもかかわらず、現実の日本語音声言語の中には観察される現象というものも存在する。本研究は以上のような問題意識に基づき、日本語音声言語の諸現象に関する萌芽的な記述を行った多くの先行研究を渉猟しつつ、先行研究での記述を計量的に再検討したものである。録音資料のデータ化には録音時間の何百倍もの時間がかかるため、従来の音声言語研究は少人数による読み上げ音声を対象としたものが多かった。しかし、本研究では、CSJを使用し、多数の話者の、しかも自発的な音声言語における諸現象を取り上げ、詳細に記述した。その結果、以下のような独自性を見出すことができた。まず、先行研究の記述を再検討する作業を通じ、自発発話音声の実態について数々の新知見を提供している。第二に、先行研究では言及されてこなかった「潜在的な現象」を見出していることも、今後、新たな研究の可能性を含め、評価できよう。第三に、ある言語現象生起の言語内的条件・言語外的条件の検討を行っていることは、言語変異研究への貢献も期待される。さらに、本研究はCSJを無批判に使うのではなく、CSJそのものの言語資料的性格を検討している点も見落とせない。そのことにより、CSJに見出される言語現象の多様性が、上述の〈標準語〉に存在する多様性の、具体例として提示できることも重要な視点である。加えて、CSJの性格を探りながら、音声学の記述法を再考する論考や独話と対話の連続性を認める論考は、今後の音声学的研究や言語学的研究の新たな展開を考えるうえで、重要である。本論文の立場への評価はさまざまであろうが、今後、人文学的な立場からCSJを使用した研究をするうえで、無視することのできないものとなるであろう。以上の点に加えて、音声言語に生起する種々の現象を研究する上での枠組みも構築している。これは、今後、「縮約形」や音声変異研究をする上で、避けて通れない論点となるであろう。ただし、課題がないわけではない。CSJが〈標準語〉のコーパスであるという立場に拘泥するあまり、他の視点からの研究の可能性を見過ごしてしまったことがあげられる。CSJのデータは各種学会での発表を録音した音声半数を占めることから、「専門的な話題を話す際の言語」が集積したものともみなして、そのような言語の研究の材料として利用する可能性も考えられる。しかし、これらは申請者の緻密な研究姿勢に対して生じた希望であり、期待である。全体として本論文の成果は十分に評価されるべきである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。